

## 「九份の風情を参考にした熱川のまちづくり」への思い

### （歴史）

熱川温泉の歴史は古い。開湯は室町時代とも言われ、江戸城を築いたことで有名な武将である太田道灌が発見したと言われている。江戸城の築城石を切り出した歴史のある東伊豆町との縁の深さを感じさせるエピソードであるが、熱川では毎年、山から切り出した大きな石を港まで運ぶ御石曳を再現し、約 12 トンの大きな石を 200 人以上が力を合わせて引く「石曳き道灌まつり」が開催されている。

### （衰退）

1970 年代はじめ、熱川温泉郷はテレビドラマ「細うで繁盛記」の舞台として脚光を浴び、多くの観光客が訪れる温泉地となった。

しかし時代は飲めや食えやの団体旅行から、節約志向の個人旅行、家族旅行へと旅の主流が変わり、旅行の目的も大きく変化をしてきた。そんなことも相まってか、その隆盛も昭和 54 年（西暦 1979 年）をピークに減少の一途を辿ることになる。

周辺の商店街はシャッターが目立ち、趣のある路地は老朽化し、街灯もまばらで暗く、人影も見られないようになり人が外を歩かない街となった。

### （変化）

そんな町の町長となった私は、着任早々に多くの住民から熱川温泉郷の再生を熱望された。しかし、役場職員に対策を聞いてみても、問題意識はあっても何ら効果的な対策が打てない状況であった。この時を機に熱川温泉郷の再生が深く頭に刻まれた。

東伊豆町の観光活性化策の処方箋は①伊豆半島各地域を訪れた観光客を東伊豆町に誘引する②誘引のためのポイントは「朝・夜の魅力の磨き上げ」③街中を歩いて欲しいので熱川は主に「夜」をテーマに磨き上げをかけようと考えた。

## （転機）

台湾に出張に行った際にたまたま「九份」を訪れた。古くて坂の多い街並み、どこか懐かしい九份の風景が熱川に重なった。

普通、観光地は日が沈むと観光客は潮が引くように帰ってしまうがここ「九份」は全く違う様子を見せた。暗くなればなるほど観光客がやってくる不思議な観光地だった。「そうだ、熱川にあの魅惑的は街、九份を創ろう！」この考えが天から降ってきた。

## （発想）

「九份」を創ろうと思いついたのには理由があった。あの「台湾提灯」である。

地元の旅館組合のメンバーに「熱川に台湾の提灯を飾り九份を創りたい！」と話した際に「何故台湾提灯なのか？日本の（白色系）提灯ではダメなのか」と詰め寄られた。それを説得するのに、岩井がかつて建築家を目指していた時の知識が役に立った。照明の色には基本の3種類がある。1つは「電球色」で、これは照明の色の中でもっとも温かみがあり、リラックスできる落ち着いた色。実際の物よりもオレンジ色に見えるので本来の色が分かりにくい（ココがポイント）。もう一つが「昼白色」で、これは照明の色の中でももっとも自然光に近く、本来の色がよくわかる。そして最後が「昼光色」で、これは照明の色の中でももっとも青白い色でくつろぎの空間よりは研究室や勉強部屋などに向いている。この3種類の色系でどれが熱川のまちづくりに相応しいか・・・古びた路地の古さを隠し、魅力的に見せる色系は何か・・・そう、台湾提灯の「電球色」である。

「九份」には金の鉱山があり、かつて繁栄を極めた。しかし、金の量が減り、1971年についに閉山。その後再び町は忘れられた存在になる。「熱川」が同じころに繁栄し、その後元気が無くなっていく過程が「九份」と重なる。しかし、その後の結果は全く異なっている。

「九份」は再生を果たし、「熱川」は衰退したままであった。何が同じで、何が違うのか。「九份」の地形と「熱川温泉街」の「すり鉢状」の地形が似ていて、坂の魅力が共通している。また、九份は映画、熱川はドラマの舞台となったことも面白い共通点である。

一方で再生の「キッカケ」があった街と無かった街の違いは大きい。九份の再生のキッカケになったのは間違いなくあの魅惑的な「台湾提灯」である。九份は提灯を飾ったことがキッカケで今では驚くほど多くの観光客が訪れる世界的な観光地となった。

熱川と九份を繋ぐためには「ストーリー」が必要であった。一人そのストーリーを探す作業に入った。頭の中は熱川と九份のことで一杯になった。歩きながらも思いを巡らせた。

先ほどの熱川と九份の共通点に加え、熱川にある「熱川バナナワニ園」には昔から台湾バナナを栽培されており、今では台湾バナナを使用したビールも販売されている。台湾を何度も訪問し、九份の皆さんはもちろん、多くの台湾の皆さんとの友好関係を創ってきた。中でも台北駐日経済文化代表処横浜分処張淑玲処長や台湾観光庁・台湾観光協会東京事務所の鄭憶萍所長をはじめ台湾九份の商店會の皆さんなど多くの皆さんの絆というストーリーが生まれた。九份の商店會の皆さんとの親交を深め、門外不出の九份の本場提灯を譲っていただいた。これからも台湾・九份と東伊豆町・熱川の絆を深め、新しいストーリーを重ねていきたいと思う。

## （進化）

一人のアイデアからスタートした「九份の風情を参考にした熱川のまちづくり」であるが、今では東伊豆町商工会が中心となった「熱川に九份が灯る。」まちづくり協議会も立ち上がり、私の思いを受け止めていただき、力強く熱川温泉郷のまちづくりを進めていただいている。

蒔いた種が目を出し、勢いよく広がろうとしている。突拍子もないアイデアに賛同いただき、協力をいただいた全ての皆さんに心からの感謝の気持ちを伝えたい。

令和7年3月20日

東伊豆町長 岩井しげき